

原 著

自立生活における身体障害者と介助者の介助関係に関する研究の現状と課題

Current issues and problems concerning research about the care relationship between
physical disabled people and their attendant in the independent living

菅 由希子

要約：本稿は、わが国における自立生活を行う身体障害者と介助者の介助関係に関する文献レビューから、介助関係がどのように論じられてきたのかを明らかにし、今後の研究課題について述べることを目的としている。文献レビューから時系列に、萌芽期(1986年～1999年)、展開期(2000年～2007年)、近年(2008年～2009年)と3つの時期に整理した。今後の研究課題として次の3点を明らかにした。第1に介助関係の相互作用に関する実証研究である。第2に、介助関係に影響を与える要因についての検討である。第3に、社会福祉学における介助関係の検討である。

Key Words：障害者、介助者、介助関係、自立生活

1. はじめに

わが国においては1970年代頃から、重度身体障害者の自立生活運動が始まり、施設で暮らすことを余儀なくされてきた重度身体障害者たちが、地域で自立生活を行うようになった。そのことの背景には、横浜で起きた母親による障害児殺害事件や、施設での非人間的な処遇等がある(安積ら1990)。重度身体障害者たちは自らの介助者たちを、団体等を通じて集め、どんなに重い障害を持っていても地域で暮らすことを可能とした。

一般的に「自立」という概念は、自分のことを自分で行うという考えが社会に浸透している¹⁾。しかし、そのような考えでは、自分で身体を動かすことがままならない重度の身体障害者は「自立」できないということになってしまう。重度身体障害者の自立生活運動における「自立」には次のような考えがある。「衣服を着替えるのに2時間かかっても、自分で着替えることを自立ととらえるのではなく、それを介助者と共に数分でしてしまっ、あとの時間を本人の望む活動をすることが自立」(北野1993:57)という考えである。すなわち、重度身体障害者の自立観とは、自己決定権の行使を自立と捉える考え方をもつのである(定藤ら1993:8)。

地域で暮らす重度身体障害者たちは、自ら介助者募集のチラシを配布することや、今まで培った人間関係をつたうこと、障害者関係団体等を通じて、自分の介助者を集める。あるいは、障害者の自立生活センターや介助者派遣を行うNPOのサービス等を利用し、介助者を集める。介助の場では、重度身体障害者自身がどのような介助が必要か、その方法を介助者に教えるケースが多い。つまり、重度身体障害者は自ら介助者を集め、自らの介助者として育てるのである。そのことから、自立生活における重度身体障害者の介助者との関係性は、他の専門職が行う援助とは異なる特異性を見出すことが出来る。さらに、「重度の障害者や高齢者ほど、つまりは介助サービスを必要とする量がふえるほど、サービスを提供する側から支配され、コントロールされる可能性も高くなる」(北野1993:56)ため、介助関係は、重度身体障害者の生活の質を見る上で重要な視点だと言える。

したがって、本稿では、わが国における自立生活を行う身体障害者と介助者の介助関係に関する文献レビューから、介助関係がどのように論じられてきたのかを明らかにし、今後の研究課題について述べることを目的としている。

2. 研究方法

文献は、インターネット雑誌検索システムである

「MAGAZINE PLUS」「GeNii」を用いて検索し、収集した。検索語は、「障害者」「介助者」「介助関係」「自立生活」を組み合わせて行った。その他に、介助関係の研究にあたる文献の参考文献からいもづる式に文献を収集した。収集の範囲として、知的障害者・精神障害者を対象とした研究は除外した。また、研究の対象を「障害者」とし、対象の範囲が身体障害・知的障害・精神障害と広範囲に及ぶ研究も除外した。また、自立生活運動は重度の身体障害者が押し進めたものであるが、介助関係の研究レビューの中で、中度の身体障害者を研究対象に含めた重度身体障害者の調査研究も見られたため、今回のレビューの対象は、中度の身体障害者も含めたものとした。

集められた文献から、(1)萌芽期(1986年～1999年)、(2)展開期(2000年～2007年)、(3)近年(2008年～2009年)と、時系列に整理した。時期の名称は便宜的に命名した。

3. 自立生活を行う身体障害者と介助者の介助関係に関する研究の現状

(1) 萌芽期(1986年～1999年)

始まりは、岡原ら(1986)に見ることが出来る。その後には続き、岡原(1990)、小倉(1998)、究極(1998)、黒田(1999)が挙げられよう。

岡原ら(1986)は、障害者の「自立生活」が抱える問題発生的な場のうち、2つの局面に焦点を当て、調査研究から社会学的な分析を行っている。第1の局面は、障害者と介助者の間で達成される相互作用、第2の局面は、障害者が介助者と共に公共の場に登場するという場面での問題である。第1の局面については、障害者の「自立生活」がうまくいくためには、障害者と介助者の間に安定的な関係が構築され、介助と言う相互作用が適切かつ自然に行われるという条件が満たされなければならないとし、相互作用内で発生するコンフリクトの具体的場面、解消方法等について言及している。第2の局面については、公共の場における人々(隣人、通行人、店員など)をオーディエンスとし、そのオーディエンスの“介入”が、障害者と介助者の相互作用に対して不安定化や解体の方向に作用することが多いことから、障害者に与えるオーディエンスの影響について考察している。

岡原(1990)は、障害者と介助者の間で発生するトラブルを、意志決定をめぐるトラブルと感情・身体をめぐるトラブルの次元で考察し、それへの対処方法として、理念的方法、経済的方法、感情的方法という三つを明ら

かにした。そして、その介助関係に介入する世間のまなざしの存在を指摘した。また、障害者と介助者は非対称的關係にあるがゆえに、対立(コンフリクト)が障害者と介助者の間の対立として具体的には現れない仕組みについて言及した。障害者と介助者の根底的なあり方それ自体を変えるために、コンフリクトを両者の対等的な関係構築の手段として提起している。

小倉(1998)は、「介助」を単に障害者の日常生活を手助けするといったレベルに留まらず、健常者の身体性、つまり無意識のレベルで再生産される健常者の身体観を変革することをも含む実践的アレンジメントではないかとしている。そして、障害者も介助者もどちらもが主体であったり、客体であったりすることはなく、いわば「介助」アレンジメント-複合体であると指摘した。例えば障害者が乗った車いすを介助者が押す動作にしても、歩く方向と速度と調子が暫時的に決定されていく。さらに、「介助者」の定義付けとして、一人ひとりその「障害」の在り方が違う障害者のそれぞれの「障害」に慣れ親しみながら、己の身体をそのような「遅れ」や不意の「攻撃」やイレギュラーな対応、つまり、そのような「暴力」をも受け入れて行く能力を培う者のことであるではないかと指摘した。

究極(1998)は、障害者運動において、障害者が「介助」ではなく「介助」という言葉を使う意味や、障害者運動と介助者の変遷について触れている。その中で、「介助者手足論²⁾」について、介助者は障害者が「やってほしい」ことだけを行い、その言葉に先走ってはならず、その言葉を享けて物事を行うこと、と説明している。そして、「介助者手足論」は、「障害者の手足になり切れ」というような乱暴な論に見えて事実はそうではなく、障害者の感覚、身体性というものを介助者が分かちあうために、健常者の(能率主義的な)感覚、身体性を捨て去れよ、というような意図の上にあったことを指摘している。さらに、介助者が、障害者の身体性を身近にしそれを分かちあうことによって、目の前にいる障害者の頭ごしに事を進めていく不自然な社会に対する異議申し立ての同志(=共犯者)になっていくとしている。

黒田(1999)は、自立生活を行う障害者にとっては介助者との関係の中での自己決定が生活のもっとも多くの場面を占めることになり、介助と言う関係行為の中での自己決定について考察することは、重要な課題となっていると指摘している。そして、介助関係とは、自己決定をいかにそのままの形で実現するかという意志をもつ障

害者と、意識しているか否かに関わらず障害者の自己決定とその実現に干渉する可能性のある介助者との関係のことであるとしている。公的な制度を利用したフォーマルな介助関係であれ、家族・友人などによるインフォーマルな介助関係であれ、障害者にはできないことがあって、それを可能にするために介助が必要となるという介助関係の非対称性を示し、介助関係を障害者自身が管理することを可能にするといわれる自立生活モデルと呼ばれる介助関係のあり方について説明した。そして、自己決定をより行いやすい介助サービスの提供方式であるといわれるアテンダント方式について検討している。

(2) 展開期 (2000年～2007年)

2000年以降、介助関係に関する論文は(1)の時期に比して比較的多くなる。この時期の研究として、山下(2000;2004;2005;2006)、石川(2004)、八巻ら(2004)、菅(2006)、丸岡(2006)、深田(2006)、前田(2006)、橋本(2007b)の研究が挙げられる。

山下(2000)は、障害者役割に焦点をあて、そこから見えてくる障害者のアイデンティティの揺れ動き、そして役割付与者としての健常者の立場について考察している。障害者役割がどのようなものか指摘し、女性障害者へのライフヒストリー調査から、彼女たちがどのような障害者役割を付与されてきたのか、また彼女たちが生活過程の中で、その役割と自己の障害をどのように認識してきたのかを示した。さらに、彼女たちが期待される障害者役割と自己とのギャップ、障害者のアイデンティティの揺れ動きが起こる要因には、健常者が深く関係していると指摘した。しかし、健常者は障害者と比べて、社会の規範が自身の姿とずれることが少ないために、障害者の悩みや苦しみを、健常者はみなくてもすむことができる。つまり、健常者と障害者との間には、立場の非対称性があり、意識のずれがあることを指摘した。

石川(2004)は、24時間介護が必要な重度障害者の介護について、社交³⁾と感情労働⁴⁾の関連で、次のような指摘をしている。介護者は、ローテーションで交代するので社交モードを保持することも可能だが、障害者は替われないがゆえに、よそゆきの自分だけを見せることができない。ずっと社会的であることは不可能であり、どうしても社交性は破綻する。そこに脱社交⁵⁾の関係が生じる。そういった障害者の非作爲的脱社交が、介護者の脱社交を支援する。このことから介護する・される関係には脱社会的な付き合いを触発する可能性があ

り、重度障害者が生きていけるのは、脱社交という感情公共性を主催できる立場にいるからであると指摘している。

八巻ら(2004)は、自立生活センターの利用者がどのように関係を構築・維持しているのか、肢体不自由者31名に調査研究を行っている。インタビュー結果から、介助者との関係構築のための方略とスキルについて、大きく分けて次の4つにカテゴリー化された。①援助者をうまく使うための方略とスキル、②介助者を育てるための方略とスキル、③介助者を気遣うための方略とスキル、④介助者と適切な距離を保つための方略とスキルである。

山下(2004)は、主に関西で1973年に誕生した健全者運動組織であるグループゴリラをモチーフとしながら、健全者運動の思想と実践について、健全者運動組織が発行してきた機関紙やパンフレット、脳性マヒ者の障害者運動団体である「青い芝の会」の障害者による著作等を用いて考察した。障害者解放運動において障害者は、生産性や効率性が重んじられる社会のなかでの障害者の位置づけを敏感に察知し、健常者中心社会そのものへの糾弾を行っていった。その時に健常者は障害者にとってどのような存在だったのかということが問われ、それに応えようとしたのが健全者運動であり、健全者運動が目指したのは、社会を変革していく闘いと、その社会のなかで安寧としている自身を問い直す闘いを行っていくことだとしている。障害者問題を自己とは棚上げしたところで論じるのではなく、自己の問題であると捉えようと障害者と健常者との関係性を考えていくことが、今もなお問われている課題であると指摘している。

山下(2005)は、1970年代の関西における健全者運動の運動展開を明らかにし、そこから見えてくる障害者と健常者の関係性をめぐる模索の様相を論じた。研究対象を、1970年代における関西の健全者運動組織であるグループゴリラとし、現在刊行されている障害当事者による著書や当時書かれた資料(機関紙、ビラ、会議のレジュメ等)、そして当時の健全者運動を担った人物へのインタビューデータを元に考察された。結果として、障害者運動が健全者運動に求めたものと、健全者運動の現実との間にある矛盾やずれの違いの様相を明らかにした。

山下(2006)は、介護福祉に関する先行研究から、介護者と被介護者との関係性についての研究成果を、そして障害当事者運動の知見から介助関係および障害問題の捉え方を整理した。考察から、介護福祉論の課題として

次の3点を明らかにした。①介護福祉論における被介護者の視点が不在であること、②介護関係が「対等」であることが望ましいとしているにもかかわらず、介護場面での主体-客体関係が固定されていること、③介護者と被介護者との相互作用を詳細に論じた研究が不十分であることである。①については、アメリカの障害者運動等の知見から、障害当事者運動は介助関係の主体の位置づけをめぐる逆転が目指されていることを明らかにした。②については、介護における主体-客体関係が固定されることによって、障害者は依存的な立場におかれることを自立生活運動や障害学は明らかにしてきたことを指摘した。③については、相互作用の先行研究が不十分とし、今後の研究課題とした。

前田(2006)は、介助現場への参与観察から得た知見をもとに、次の2点について論じた。①介助者の存在を透明化することの不可能性を論じることを通じて、「健常者/障害者」関係と「介助者/利用者」関係という、しばしば同一視されがちな2つの2項軸の相違を指摘した。②「介助」を巡る議論に埋もれがちであった「介助者のリアリティ」を前景化して論じることの意義を指摘した。障害者という一方の主体からの解釈のみでは発見できない問題があり、さらに、介助者は「健常者というノーバディ」などではなく、現に介助の場において、アイデンティティやポジションをもった「何者か」として「障害者の自己決定」に介入してしまっている。よって、介助者のリアリティを基に自立生活を巡る議論を再構成してゆく必要性を主張した。

菅(2006)は、重度身体障害者の自立生活における障害者と介助者の感情労働がどのようなものであるかを分析し、介助関係のあり方について考察した。障害者4名と介助者11名に対するインタビュー調査のデータを元に、感情労働の諸概念である感情規則・感情管理・感情公共性、援助関係におけるコンフリクトの視点から分析を行った。結果として、次の5点が明らかになった。①介助関係において感情労働がどのように行われているかを明らかにするために、どのような感情規則があるのかを明らかにした。②介助関係において「否定的な感情表出・保持を行わない」という感情規則があり、親密化を促す感情規則と親密化を抑制する感情規則が、併存することにより葛藤が生じることを明らかにした。③感情管理の仮説を検討する中で、感情規則を障害者・介助者、どちら側に設定するかを考察した結果、障害者側は自己に対する感情管理と他者に対する感情管理があることが

明らかになった。④コンフリクト場面を検討する中で、コンフリクトを起こす介助関係と、コンフリクトを回避する介助関係の2つの類型化が可能になった。⑤感情公共性場面を検討する中で、具体的にどのような場面で感情公共性が生成するのかを明らかにした。

丸岡(2006)は、現在の介助の社会化を介助行為の労働化と把握した上で、聞き取り調査に基づき障害者と介助者の意識および障害者の生活と介助関係の相互作用の分析を通じて、同化統合と異化統合という2つの介助の社会化論の意義を検証し、今後の介助の社会化のあり方を論じている。また、介助行為を障害者のできないことを補う手段的身体行為と、障害者と介助者の感情が交錯する感情的相互行為の2つの要素が存在しているとした。結論として、介助関係への志向は、①労働関係、②情緒関係、③異文化交流関係の3つが存在するとした。

深田(2006)は、全身性障害者の自立生活における介助関係において、介助される自己の「自己決定」が重要な位置をしめるとし、「自己決定」と「<他者性>をふくみこんだ自己決定」が達成される交点に焦点を当て、それがどのようなものかを明らかにするために4つの自立生活の参与観察とインタビュー調査を行った。調査から次の3点が明らかになった。①介助を介助する/される側双方のあり方から認識すると、そこではなによりも介助される人が対立により葛藤していること。②介助される人にとって介助する人は<他者性>をもった存在であり、そのことは障害者に強く認識されていること。③その<他者性>に対して障害者は様々に対しておとくに「配慮」を有効に運用している人ほど良好な介助関係を成立させていることである。

橋本(2007b)は、自立障害者と介助者の間で行われる介助行為に内包された関係性を明らかにするために、次の3つの時期に区分して考察した。①障害者たちが障害者差別に抗する運動を積極的に推し進めつつ地域で暮らすことを始めた創成の時期、②は自立生活運動を広めつつ介護保障を要求した時期、③公的介護制度が広められホームヘルパーが介助場面に登場してきた現在という3区分である。考察の結果、次のことを明らかにした。①の時期では、自立障害者は、共に障害者差別に抗することを介助者に求めた。②の時期では、自立障害者は、相互理解のためにはコンフリクトも辞さないという強い生き方に答える介助者を求めた。③の時期では、自立障害者と介助者の関係性は双方で能動的であり受動的であるという観点から、関係性の反転は、関係を安定させる

が、同時に「医学モデル」化におかれたヘルパーが介護の専門職としての役割を果たすことを志向し、障害者をディスエイブリングすることに繋がるという両義的な性格をもつと指摘した。

(3) 近年 (2008年～2009年現在)

近年の研究動向としては、山下 (2008)、杉田 (2008b)、前田 (2009)、後藤 (2009) が挙げられる。

山下 (2008) は、1970年代の関西の障害当事者／健全者運動に焦点をあてた、障害者と介助する健全者との関係性に関する実証研究を行った。内容は次の3点である。

①文献資料をもとに、1970年代における障害当事者運動と健全者運動の軌跡をみた。青い芝の会神奈川県連合会による運動と、そこで蓄積された議論を概観し、続いて関西における障害者運動の展開を跡づけた。②8名の元グループゴリラのメンバーを対象としたインタビュー調査結果について論じた。③1977年に障害者からの糾弾を受けたグループゴリラと、問題を提起した側である障害当事者運動がその後進んだ道について論じられた。

杉田 (2008b) は、1970年代前半の「青い芝の会」の闘争、介助者論の検討から、当時目指された介助関係とは、「青い芝の会」の公式見解である「健全者手足論⁶⁾」でもなく、公的介助システムでもなく、「障害者と介助者の敵対性への自由」ではないかと指摘している。「障害者と介助者の敵対性」とは、両者がかかわり合い衝突することによって、お互いに影響を受けて「変えられていく」ということである。1970年代前半における障害者運動の垣根の中には、いわば敵対性を通した自立のポテンシャルがありえたとしている。

前田 (2009) は、「介助」をめぐる取り交わされる人びとの社会的相互作用に照準したうえで、障害をもつ当事者と、かれらの生を日常的に支援する者たち、すなわち介助者との関係性がどのように変容し、また、介助の「現場」におけるリアリティは、両者のいかなる実践によって作りだされているのかを、社会学的に明らかにした。

後藤 (2009) は、障害者介助をめぐる身体について、特に「介助者は、障害者の手足」という思想がどういった背景から生まれ、そしてそれがどのような意義をもちうるのか、という点に焦点をあて考察した。身体社会学に関するメアリ・ダグラス、ピエール・ブルデュー、アーサー・W・フランクの論考から、障害者介助を論じた。結論として、「介助者は、障害者の手足」という思想とは、

自由を欲望し、自己や他者の身体をつながることを受け入れるためのプラティークであり、介助を、身体の境界侵犯として忌避するのではなく、「他の身体との関係の中で人間性を培っていくもの」として肯定できるものだとした。

4. 研究レビューのまとめと今後の研究課題

(1) 研究レビューのまとめ

地域で自立生活を行う身体障害者と介助者の関係性の研究を概観することで、社会学、障害学、社会福祉学等、様々な学問領域にて研究されていることが明らかになった。まとめると次のようになる。

萌芽期 (1986年～1999年) では、岡原ら (1986)、岡原 (1990)、小倉 (1998)、究極 (1998)、黒田 (1999) が介助関係について論じていた。岡原 (1990) が介助関係について調査研究に基づき、介助関係にコンフリクトを起こすことを提案しているのは画期的であったと考えられる。コンフリクトを起こすことへの意図は、障害者と介助者の対等な関係性の構築である。むしろ積極的にコンフリクトを行うことへの提案は、施設を出て地域で暮らす障害者の介助関係に求められる特異性であるといえるだろう。また、小倉 (1998) は、障害者と介助者を「介助」アレンジメントとして考察し、究極 (1998) は「介助者手足論」から介助者の在り様について考察している。黒田 (1999) は、自立生活モデルにおける介助関係のあり方や、自己決定をより行いやすい介助サービスの提供方式であるアテンダント方式について考察している。

展開期 (2000年～2007年) では、山下 (2000; 2004; 2005; 2006)、石川 (2004)、八巻ら (2004)、菅 (2006)、丸岡 (2006)、深田 (2006)、前田 (2006)、橋本 (2007b) が介助関係について論じていた。この時期の特徴として、健全者運動との関連の中から介助関係について研究されるようになった (山下 2004; 2005)。また、石川 (2004) が、介助関係と感情労働について言及し、菅 (2006) により実証研究が行われた。山下 (2000) は、障害者役割や役割付与者としての健全者の立場を考察した。山下 (2006) は、介護福祉論の先行研究から、介助関係および障害問題の捉え方を整理した。八巻ら (2004) の研究は、今まで論じられていなかった障害者の関係構築・維持に関するスキルに視点を当てた、貴重な研究であった。丸岡 (2006) は、障害者と介助者の意識と、障害者の生活と介助関係の相互作用を分析した。深田 (2006) は、「自己決定」と「<他者性>をふくみこんだ自己決定が達成

される交点がどのようなものかを考察した。前田(2009)は、障害者と介助者の関係性の変容と、介助の「現場」におけるリアリティがどのように作り出されるかを明らかにした。橋本(2007b)は、介助行為に内包された関係性を明らかにするために、時期を3つに区切って考察した。

近年(2008年～2009年現在)では、山下(2008)、杉田(2008b)、前田(2009)、後藤(2009)が介助関係について論じていた。特に注目したいのは、杉田(2008b)が指摘した「障害者と介助者の敵対的自立」である。これは、岡原(1990)が指摘した、障害者と介助者の対等的な関係構築の手段である「コンフリクト」の考えをより一層具体化したと考えられる。「障害者と介助者の敵対的自立」は障害者と介助者両者の自発性・主体性が求められるのである。また、後藤(2009)は身体社会学の視点から障害者介助について考察した。

(2) 今後の研究課題

上記の研究の概観から、今後の研究課題として次の3点が明らかになった。

第1に、介助関係の相互作用に関する実証研究である。それは介助関係の相互作用に関する実証研究が少ないことに依拠する⁷⁾。相互作用に対する調査分析は、岡原ら(1986)、岡原(1990)、前田(2006;2009)等に見ることができるが、研究の蓄積から十分に明らかにされていない。ともすれば2者関係に埋没してしまう関係性の中で、今現在、介助の場ではどのような営みがあるのか。介助関係の相互作用に関する実証研究が今後望まれる。

第2に、介助関係に影響を与える要因についての検討である。介助関係に影響を与える要因についての考察は岡原ら(1986)等に見られるものの、検討が十分ではない。介助関係に限らず、関係性というのは絶えず変化するものである。どのような要因が介助関係を安定化させるのか、あるいは不安定にさせるのか。介助関係における2者のミクロ的な分析に留まらず、介助の場における地域、ネットワーク、政策等についても検討することにより、介助関係をより多層的に捉えられるのではないだろうか。

第3に、社会福祉学の研究領域における介助関係の検討である。本稿における文献レビューでも、社会学や障害学の研究領域のものが多く見られ、社会福祉学で、介助関係を論じているものが少ない。社会福祉学において、援助を受ける側である障害当事者が主導となった援助関

係について研究は少なく、その援助関係がどのようなものであるか考察することに、研究意義はあると考えられる。よって、介助関係に関する論考を社会福祉学の中に位置づけていくことが望ましい。

5. おわりに

本稿にて、自立生活における身体障害者と介助者の関係性の研究をレビューすることから、初めて研究された1986年から近年まで、どのように研究されてきているか、その諸相と今後の研究課題が明らかになった。障害者と介助者の介助関係の研究で得られた知見の多くは、障害当事者および介助者による実践からの示唆とも言えよう。その示唆を社会福祉学の領域で十分吟味することが、よりよい援助へ資すると考えられる。

注

- 1) 広辞苑(第五版)において、「自立」は「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること」と定義されている。
- 2) 究極の論文では「介助=手足」論とされていたが、現在では「介助者手足論」と記述されることが多いため、「介助者手足論」とした。「介助=手足」論と同義である。介助関係の中で、障害者の自己決定が侵害されることへのアンチテーゼとして、1970年代以降の障害者運動の中から生まれた主張である(後藤2009:226)。
- 3) 社交とは、「よそゆきの自分を見せる身振り、感情ワーク、目的のない会話、礼儀作法によって他者を承認する身振りの交換である」(石川2004:201)としている。
- 4) 感情労働とは、「職務として求められ、遂行される感情管理」(石川2004:63)としている。
- 5) 脱社交は、「よそゆきの自分を見せることはしないが、感情ワークと目的のない会話と礼儀作法は申し分ない」というような洒落な人の振る舞い(石川2004:205)。あるいは「礼儀作法ないし、感情ワークもできないし、会話も寡黙だし、自分をよく見せることもしないが、自己流の他者承認だけはたっぷりおこなう」のも脱社交としている(石川2004:205)。
- 6) 「健全者手足論」は、「すべての健全者は、障害者の手足であるべき」(杉田2008:237)という思想である。
- 7) 介助関係の相互作用に関する実証研究が少ない点については、山下(2006)も指摘している。

文 献

- 朝霧裕・秋山由紀・市野川容孝 (2007) 「〈鼎談〉 介助って何だろう？」市野川容孝・鷺田清一・萩野美穂・石川准編『身体をめぐるレッスン4 交錯する身体』岩波書店, 109-142.
- 在原理恵 (2002) 「地域生活障害者の介助をすることの積極的意義」『社会福祉 (日本女子大学社会福祉学科)』43, 135-146.
- 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也 (1990) 『生の技法—家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店.
- 深田耕一郎 (2006) 「自己決定と配慮の交わる場所——全身性障害者の自立生活における介助する／されることをめぐって——」『社会学研究年報』13, 141-153.
- 後藤吉彦 (2005) 「障害者／健全者カテゴリーの不安定化にむけて——障害学における新たな機軸として——」『社会学評論』55 (4), 400-417.
- 後藤吉彦 (2009) 「『介助者は、障害者の手足』という思想——身体社会学からの一試論」大野道邦・小川信彦編著『文化の社会学——記憶・メディア・身体』文理閣, 225-243.
- 橋本真奈美 (2005) 「自立生活障害者がもつ『介護』とは」『総合科学』12 (1), 95-120.
- 橋本真奈美 (2007a) 「自立生活障害者の地域生活を支えるヘルパーに求められる障害者観—ヘルパーがもつ可能性と困難—」『社会モデル』と『医学モデル』—」『社会関係研究』13 (1), 43-74.
- 橋本真奈美 (2007b) 「自立障害者と介助者の関係性についての一考察—創成期から現在までの、求められる役割とその本質—」『社会関係研究』12 (2), 29-55.
- 市野川容孝 (2000) 「ケアの社会化をめぐる」『現代思想』28 (4), 114-125.
- 市野川容孝 (2001) 「『障害者』差別に関する断層——一介助者としての経験から」坪井秀人編著『偏見というまなざし 近代日本の感性』青弓社, 229-242.
- 市野川容孝 (2008) 「介助するとはどういうことか——脱・家族化と有償化の中で——」上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケアの思想と実践1 ケアという思想』岩波書店, 135-150.
- 市野川容孝・杉田俊介・堀田義太郎 (2009) 「『ケアの社会化』の此／彼岸 障害者と介助者の敵対的自立へ向けて」『現代思想』37 (2), 119-155.
- 石川准 (2004) 『見えないものと見えるもの—社交とアシストの障害学』医学書院.
- 石川准 (2005) 「ケアとアシスト」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』1 (1), 11-15.
- 菅由希子 (2006) 「重度身体障害者の自立生活における介助関係—感情労働の視点から—」『北星社会福祉研究』21, 42-62.
- 金満里 (1996) 『生きることのはじまり』筑摩書房.
- 金満里 (2008) 「ケアされる身体」上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケアの思想と実践3 ケアされること』岩波書店, 35-55.
- 北野誠一 (1993) 「自立生活支援の思想と介助——援助者の役割とインパワメント——」定藤丈弘・岡本栄一・北野誠一編『自立生活の思想と展望 福祉のまちづくりと新しい地域福祉の創造をめざして』ミネルヴァ書房, 42-70.
- 北野誠一 (2003) 「障害者の自立生活と自立生活支援」定藤丈弘・佐藤久夫・北野誠一編『現代の障害者福祉 [改訂版]』有斐閣, 49-84.
- 黒田隆之 (1999) 「障害者の自己決定と介助」北野誠一・石田易司・大熊由紀子・里見賢治編『障害者の機会平等と自立生活—定藤丈弘 その福祉の世界』明石書店.
- 究極 Q 太郎 (1998) 「介助者とは何か？」『現代思想』26-2, 176-183.
- 前田拓也 (2006) 「介助者のリアリティへ——障害者の自己決定／介入する他者」『社会学評論』57 (3), 456-475.
- 前田拓也 (2009) 『介助現場の社会学：身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院.
- 丸岡稔典 (2006) 「障害者介助の社会化と介助関係」『障害学研究』2, 70-98.
- 西浜優子 (2002) 『しょうがい者・親・介助者：自立の周辺』現代書館.
- 小倉虫太郎 (1998) 「私は、如何にして＜介助者＞となったか？」『現代思想』26-2, 184-191.
- 岡部耕典 (2006) 『障害者自立支援法とケアの自律——パーソナルアシスタンスとダイレクトペイメント』明石書店.
- 岡原正幸 (1995) 「コンフリクトへの自由——介助関係の模索」安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也 (1990) 『生の技法—家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店, 121-146.
- 岡原正幸・石川准・好井裕明 (1986) 「障害者・介助者・オーディエンス——障害者の『自立生活』が抱える諸問題——」『解放社会学研究』1, 25-41.
- 小山内美智子 (1997) 『あなたは私の手になれますか——心地よいケアを受けるために』中央法規出版.
- 小山内美智子 (2008) 「“ケアされるプロ”として半世紀——日本のケアは変わったか——」上野千鶴子・大熊由紀子・大沢

- 真理・神野直彦・副田義也編『ケアされること』岩波書店、35-55.
- 定藤邦子（2008）「障害当事者運動における介助者の役割——大阪青い芝の会の運動におけるグループ・ゴリラを事例として——」『Core Ethics』4, 119-130.
- 定藤丈弘・岡本栄一・北野誠一編（1993）『自立生活の思想と展望 福祉のまちづくりと新しい地域福祉の創造をめざして』ミネルヴァ書房.
- 杉田俊介（2008a）「ケア労働者にとって自立生活とは何か？——障害者介助の現場から」『季刊福祉労働』119, 70-77.
- 杉田俊介（2008b）「[無能力批評 C]一九七〇年代前半神奈川青い芝と無能力のメルティングポイント」『無能力批評——労働と生存のエチカ』大月書店、222-267.
- 田中恵美子（2009）『障害者の「自立生活」と生活の資源——多様で個別なその世界』生活書院.
- 時岡新（2002）「介助者という他人について—ある『自立生活』の経験から—」『母子研究』22, 54-72.
- 時岡新（2008）「障害当事者の主体性と非力」上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケアされること』岩波書店、35-55.
- 上野千鶴子・春日キスヨ・市野川容孝（2002）「介護の社会化—新たな領域の発見」『現代思想』30（7）、58-87.
- 渡辺一史（2003）『こんな夜更けにバナナかよ——筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち』北海道新聞社.
- 八巻（木村）知香子・山崎喜比古（2004）「自立生活を志向する障害者—介助者関係構築の方略とスキル」『ソーシャルワーク研究』30（2）、46-51.
- 山下幸子（2000）「障害者と健常者の関係から見えてくるもの——障害者役割についての考察から」『社会問題研究（大阪府立大学社会福祉学部）』50（1）、95-115.
- 山下幸子（2004）「健常者として障害者介護に関わるということ——1970年代障害者解放運動における健全者運動の思想を中心に」『淑徳大学社会学部研究紀要』38, 52-60.
- 山下幸子（2005）「障害者と健常者、その関係性をめぐる模索——1970年代の障害者／健全者運動の軌跡から」『障害学研究』1, 213-238.
- 山下幸子（2006）「介護と介助、そして障害問題の捉え方」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』40, 21-38.
- 山下幸子（2008）『「健常」であることを見つめる——一九七〇年代障害当事者／健全者運動から』生活書院.
- 横塚晃一（2007）『母よ！殺すな』生活書院.
- 吉田三千代（2002）『聞き書き ちよっと青空』共同文化社.